

イスラームの人間観①

宗教学における人間

いわゆる「宗教」と呼ばれる現象については、これまで多くの定義がなされてきた。18世紀以降の宗教学研究のなかで明らかになってきたのは、宗教を普遍的なかたちで定義するのは非常に困難だということである。

こうした困難さの一方で、宗教をめぐる確実にそうだとと言えることもある。それは、「宗教」には担い手である人間が存在する／した、ということである。私自身の経験に即して言えば、どうしても宗教を教義（教え）の視点から見てしまって、信仰者である人間の側に立つ視点が足りなかったように思う。

宗教を定義したうえでの宗教理解は、確かに宗教学という学問分野がもつ特徴の一つでもある⁽¹⁾。しかしながら、筆者はイスラームのテキストに向き合った信仰者の言葉を読むことではじめて、宗教についての理解が深まったようにも思う。この意味では、イスラームの人間観は、担い手であるムスリムに向き合うことによってこそ理解できるのかもしれない。そこで今回は、人間という存在がイスラームのなかで、どのように論じられてきたかについて取り上げたい。

アダムの創造

クルアーンにはイスラームにおける最初の人間であるアダムの創造が端的に記されている。ユダヤ教・キリスト教では、聖書に人間が「神の似姿」として創造されたと記されている。その一方で、イスラームではこうした記述は、預言者ムハンマドの言行録であるハディースに残されている。

人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。彼（神）は一つの魂からあなたがたを創り、またその魂から配偶者を創り、兩人から、無数の男と女を増やし広められた方であられる。
(クルアーン4章1節)⁽²⁾

イスラームでは、数えきれないほどのクルアーン注釈が記されている。聖典の理解は必ずしも一つである必要はない。なぜなら、神は人々が置かれた状況に応じた言葉を発しているからである。したがって、今ここで啓示を読む人の心に届く“コトバ”を引き出すことができるのが、聖典の特徴である。

先のクルアーンに対する注釈として、著名なクルアーン注釈者の一人であるイブン・カシールは次のように解釈する（〔 〕はクルアーンの本文）。

神は自らの力を通して、一つの魂—すなわちアダム—から彼ら（人間）を創造した。〔またその魂から配偶者を創り、すなわちイヴを、彼の左のアバラ骨から創造した。そのあいだ、アダムは眠っており、目覚めると彼女を見て驚いた。〕⁽³⁾

アダムは地上の土塊として固められた後に、神によって魂が吹き込まれた。その後、神はアダムを眠らせて、彼のアバラ骨からイヴを創造した。その後、全ての人間はアダムとイヴのあ

いだから誕生した。それゆえに、人間は「一つの魂」から創られたと、イブン・カシールによって理解される。「人類」を表すアラビア語が「バヌー・アードム」（アダムの子孫たち）であるのは、アダム創造に関わっている。

イスラームにおける人間の誕生

イスラームの聖典クルアーンには、人間の創造や終末における審きについて記されている。クルアーンでは、創造から終末まで直線的な時間軸で理解することが可能である。つまり、すべての人間がこの直線的な時間軸のいずれかで誕生して死ぬこと、さらに、神は現世での生き方に基づいて、来世で楽園か地獄のどちらで暮らすかを決定するということである。

クルアーンには「人間章」（Sūrat al-Insān）という章があるが、そこには人間創造が次のように描かれている。

人間には、何ものとも呼べない、長い時期があったではないか。本当に我（神）は彼を試みるため混合した一滴の精液から人間を創った。それで我は聴覚と視覚を彼に授けた。我は人間に（正しい）道を示した。感謝する者（信じる者）になるか、信じない者になるか、と。（クルアーン76章1～3節）

すべての人間は、生殖活動を通してこの世に生まれ出でることになる。それまでは私たち人間はどこにも存在しておらず、何ものとも呼ばれない期間であった。言い換えれば、人類の創造以降、人間が一つの命として生まれ落ちるまでには、相当の長い年月が経過しているのである。

「混合した一滴の精液」について、イブン・カシールが記すところによれば、「男性の水（精液）と女性の水（精液）を混ぜたもの」である⁽⁴⁾。クルアーンが記された時点では、精子と卵子の受精は知られていなかった。その代わり男女ともに精液を有していると考えられており、人間が誕生するには双方の精液が混ざり合う必要があると考えられていた。

少なくともクルアーンを解釈するレベルでは、人間は男女から成り立っている。しかしながら、男女の関係については、どのように理解されてきたのだろうか。今回はこの点について考察したい。

〔註〕

- (1) 2010年に開催された国際宗教学宗教史学会（カナダ・トロント大学）では、「宗教—人間の現象として」（Religion—A Human Phenomenon）という共通テーマが設定された。このことも、人間側から宗教にアプローチする動きの重要性を理解できるだろう。
- (2) 訳出に際しては、『日亜対訳 注解 聖クルアーン』（日本ムスリム協会）を参照したが、文脈に応じて変更した点もある。
- (3) Ibn Kathīr, *Tafsīr al-Qurʾān al-ʿAzīm*, Hānī al-Hājj (ed.), Cairo: Dār al-Tawfiqīyah li-l-Turāth, 2009, vol. 2 in 8 vols., p. 188.
- (4) *Ibid.*, vol. 8 in 8 vols., p. 188.